

ドイツ語圏の社会と文化 —ホロコースト研究への一視点

関 口 宏 道

はじめに

教員が取り組んだ授業内容と方法、その成果の紹介も重要であるが、ここでは学生がこの授業をどのようなものとして受け止め、どのように授業と取り組んだのかを報告したい。授業内容と方法については、すでに『青山スタンダード論集』第2号(2007年)に掲載されているので、繰り返しは避けた。ただし、授業内容に関しては、焦点をドイツの反ユダヤ主義からホロコースト研究そのものへと移行させた。以下には真剣に授業と取り組み、問題提起の多いレポートを提出した一人の学生の声(「、、、」の部分)に耳を傾けることにする。(学生のレポートからの引用に関しては承諾を得ている。)講義概要よりも学生の声にこそ耳を傾けていただきたい。

I. 講義内容

1-1. 日常生活の中の反ユダヤ主義、外国人排斥運動の実情を紹介。

「例えば、日本で民族浄化、外国人排斥が起ったら、私はナチス政権時代のユダヤ人のように、追放または大量殺人されてしまううちの一人である。そのため、ユダヤ人に起った出来事は、今後の世界の動き次第で、他人事ではなくなる可能性は十分にある。、、、外国人排斥はどの国、どの町、どの学校や職場にも存在する。実際、日本は難民の受け入れ拒否を行い、さらには国連人権委員会が行った国連総会で「人種主義、人種差別、外国人排斥は日本社会における現実」と報告された。アイヌ民族や沖縄の人びと、在日朝鮮人と中国系コミュニティ、アジア・中東・ヨーロッパ・アフリカからの移民に対する差別が実

質的に存在する。、、、民族以外でもハンセン病患者など、同民族でありながら差別される人びともいるくらいである。日本は昔から、自分たちと異質なものを嫌い、同じ者どうしでかたまるのが好きな実に閉鎖的な国民である。国家が主宰していなくても、ナチスはどこにでも存在し、また私たち一人ひとりが小さなヒトラーでもあるのだ。、、、本当にグローバルな社会を目指すのなら、自分たちと違う文化や宗教、価値観を認めることが必要ではないだろうか。第二次世界大戦で亡くなったユダヤの人びとの命を無駄にしないためにも、私たちは彼等の犠牲から学び、それを実践しなければならない。」

1-2. 現代ドイツに見る外国人排斥運動と反ユダヤ主義

最近のドイツにおける反ユダヤ主義に関する関口論文の紹介（玉川大学学術研究所紀要第12号2006年）

R. ジョルダーノは『第二の罪 ドイツ人であることの重荷』（1987年）の中で、ドイツ人は1945年以後もヒトラーの下でのドイツ人の罪（第一の罪）を心理的に抑圧し、否定している（第二の罪）、ドイツ社会はナチズムとその遺産との対決を回避していると語り、A./M. ミチャーリヒも同様の見解を『喪われた悲哀 ファシズムの精神構造』（1972年）の中で表明している。この論文は、いかに現代ドイツ社会（特に1998年から2003年）がこうした「過去の克服」問題と取り組んでいるのかを検証したものである。結論として、ドイツ連邦共和国の公的立場は反・反ユダヤ主義であるが、一般市民のみならず、一部のインテリ、政治家にも依然として副次的反ユダヤ主義思想が存続している、統一後のドイツにおいてもなお過去の否認、抑圧、相殺、投影といった姿勢が見られることが確認される。現代ドイツ社会はアウシュヴィッツが突きつける問題となお十分に対峙しているとは言えない。A./M. ミチャーリヒは、ドイツ人は過去と誠実に向き合うことを回避してきた結果、新しい国民的アイデンティティの確立と反ユダヤ主義との間で方向性を失っているように見える。」と述べている。M. ミチャーリヒによれば、今必要なことは「悲哀作業」であるという。それは「自分たち自身がユダヤ人の非人間化に加わったことと、我々が陥った

集団的な良心の麻痺状態とに、それに相応しい感情をもって対峙することである。(『過去を抹殺する社会 ナチズムの深層心理』1989年) A./M. ミチャーリヒは以下のようにも述べている。「悲しみは、ただ、ある個人が他の個人に感情移入出来る場合においてのみ、成立する。」ドイツにおいて、他者との共存の可能な社会への道はなお険しいと考えざるを得ない。このことは「過去を水に流す」日本社会も同様である。他者への配慮の欠如した社会では、真の意味での相互理解は困難である。

「ドイツ人の第二の罪、自分たちの行った事から目を背け、それを忘れようとする事、これには激しい怒りを感じた。たしかに、ショアは今の若い世代の人びとが犯した罪ではないし、あまりにも大きすぎる罪である。しかしそれを忘れてしまっては、ユダヤ民族はどうしたら良いのか。やった方は忘れても、やられた方は忘れない。まさにこれである。ユダヤの人びとの怒りや悲しみはどうすれば報われるのであろうか。ドイツ人が民族としてこの罪を負い、忘れず、向き合って行く事で初めて彼らの思いは報われるのだと私は考える。...もう一点気になったのは、「忘れる」という単語、そして「この犠牲者を忘れる」ということは、彼らをもう一度殺害することになる」という一文。ショアで奪われたユダヤの人びとの命は、歴史が語られることによって、その歴史を生き続けているのである。彼等の魂は、歴史に、その歴史を語る私たちの言葉に、そしてその言葉から私たちが考える思想となり、その思想が身体の一部となった私たちの中で生き続けるのである。だからこそ、私たちは過去を忘れてはならないのだと強く感じた。」

1-3. 反ユダヤ主義、ホロコースト、ジェノサイド、ポグロム、ショアなどの言葉の定義についての簡単な説明

「ホロコーストが指すのは、ユダヤ人だけではなく、黒人、ソ連のユダヤ人、イスラエルに占領されたアラブ人、ポーランド人やリトアニア人などの殺害も指すことがある。日本もホロコーストを行った事がある。朝鮮半島での植民地

支配時代、日本人は朝鮮の人びとを人間として扱わず、遊び道具のように扱い、破壊すなわち虐殺を繰り返した。そして日本もドイツと同じように「目を背けている」ままなのである。自国の罪の意識は国民にはほとんどといってよいほどなく、苦しんでいるのはその時代を生きた当事者だけである。…、日本人の心の中では朝鮮の人びとに対して行ったホロコーストの記憶は消え始めている。未だに私たち日本人の心の中ではホロコーストが起っているのだ。ユダヤ人に起ったようなホロコーストはもう起る事はないかもしれない。しかし、私たち人間はもっと身近で個人的な所でホロコーストを起していくのではないかと私は考える。記憶のホロコースト、精神的な面でのホロコースト、罪の意識と共に、過去もホロコースト、そして事実さえも自分たちの都合でホロコーストをしてしまう。メルケル首相の演説（イスラエル国会での演説、全文を日本語訳で紹介した）に、「人間性は過去に対する責任から生まれる」という一行があった。記憶を抹殺し始めている私たちは果たして成長できるのだろうか。心のない人間になってゆきそうで怖くなる。そのためにも、今は記憶を正しく伝えること。記憶のホロコーストだけは避けなければならない。」

1-4. Ch. ブラウニング『普通の人びと 第 101 警察予備大隊とポーランドの最終解決』1992 年。

従来のホロコースト研究は犯罪者、犠牲者、傍観者に焦点を当ててきた。また犯罪者の反ユダヤ主義と人種主義に焦点を当てたイデオロギー史とナチの人種政策実施に焦点を当てた制度史が主流であった。しかし大量殺害機構の末端にいた「普通の人びと」を対象とすべきであると考えたブラウニングは、第 101 警察予備大隊の隊員たちの尋問調書をもとに、いかにして民衆からなる加害者が「職業的殺戮者」となったのかを問題とした。彼は普通の人びとがなぜ殺人者となったのかについて以下のような要因を整理して挙げている。戦時特有の残忍性、人種差別主義、職務の断片化と日常的手順化、犯行者の特別選別、出世第一主義、命令への服従、権威崇拜、イデオロギー的教化、体制順応など。しかし彼らの行動は断片化、日常手順化、官僚制による非人格化によっては説

明出来ない。従来の研究では「権威主義的パーソナリティー」(アドルノ)という概念によって説明されてきたが、ブラウニングは Ph. ジンバードの監獄実験(スタンフォード監獄実験)、あるいは S. ミルグラム実験をもとに、状況的制約が大きな原因であると主張した。(映画 Es, あるいは小説 The Waveなどを参照。)彼はミルグラムの言葉を引用している。「人びとが世界を解釈する仕方を統制することは、行動を統制する一つの方法である。イデオロギー的正当化は自発的服従を得るために決定的なことである。というのは、イデオロギー的正当化によって、人は自分の行動が望ましい目標に役立っていると考えることが許されるからである。」結論的に、彼は普通の人びとは状況的制約(人種差別主義や反ユダヤ主義的宣伝)を受け、自分たちの優秀性と人種的血縁関係、さらにユダヤ人が劣等で他者であるという感覚を吹き込まれていたと考えた。

『我々自身の中のヒトラー』(M. ピッカート)に「多くの殺人者たちは殺人者のような顔をしていない」という記述があった。これはブラウニングの主張通り、彼らは当時普通の人だったからである。ナチスの特徴は、街角のたばこ屋の店員が、友人の友人が、隣に住む隣人が、普通に仕事をし、食事をし、おしゃべりをしている日々の中に、殺人を犯し、毒ガス地獄の悪鬼へと本人たちも意識なく変化する事であり、そしてその次の日にはまた普通の生活に戻ることが出来る事である。、、、ナチスの残虐行為は正しいことを正しいと叫び、間違ったことは不正だと叫ぶことが出来ない機械装置化した心から生まれてしまった。そしてこうした心は、プロパガンダや空気・メディアによって汚染され始めた所から生まれてしまった。」

1-5. D. J. ゴールドハーゲン『ヒトラーの自発的死刑執行人』1996年。

ゴールドハーゲンはブラウニングと同じ史料に依拠して、「普通の人びと」ではなく、「普通のドイツ人」を対象にした。彼は人間を環境に左右されるのではなく、自らの判断によって考え、行動するものとして考察する。非人格的な制度と抽象的な構造を問題とするのではなく、ホロコースト研究の重点を犯罪

者、それを生み出した社会に移したいと主張する。犯罪者の精神的側面と彼らを生み出した社会、政治文化を対象とすると宣言した。彼は言う、ホロコーストを理解しようとする者は、まずそれをドイツ史の歴史的発展として理解しなければならない。この社会には「悪意ある反ユダヤ主義」が存在し続けた。ナチスあるいはヒトラーがいなければ、ホロコーストは決して起きなかったであろう。しかし同様に重要であったのは、大部分の普通のドイツ人が示した受容的態度であった。この受容的態度がなければ、ナチ政府は600万のユダヤ人を殺害することは出来なかったであろう。ドイツにおいてのみ、反ユダヤ主義的住民とユダヤ人を殲滅しようと思える政府が存在したためにホロコーストは起きたのである。彼は結論として言う。「全く普通のドイツ人が特定の反ユダヤ主義によって動機づけられていた、その反ユダヤ主義がユダヤ人は死滅させなければならないとの結論を持たせた。実行者の確信とこの特定の反ユダヤ主義が唯一ではないにしても、彼等の行動の決定的原因であった。さらに、普通のドイツ人が人種主義的・悪魔的な反ユダヤ主義を抱いていたことは間違いない、それが抹殺計画の推進力であった。警察予備大隊とその隊員の行動から結論されるのは、それがドイツ国民全体にも言えるということである。これらの全く普通のドイツ人がなしたことは、また他の全く普通のドイツ人によってもなされうるのである。」ゴールドハーゲンは隊員のみならず、普通のドイツ人も反ユダヤ主義的思想の持ち主で、ヒトラーの自発的死刑執行人であったと結論した。

「感じたことは、今世界がどんな状況にあらうと、私もこの「何かに従う中で、決定を行うことの出来る個々人」であるのだと再認識させられたことである。私たちは、今まで大抵の人が大人のひいたレールの上を歩いてきた。勿論、はずれることもできたかもしれないが、マジョリティの人間はレールの上をそのまま歩くことを選択して生きてきたに違いない。レールが必ずしも正しいかどうかを確かめる事は二の次にして。しかし、ここまできるとだんだん、レールの下に隠されたいくつもの道がある事に気づき始めた。「私たちの選んだ事、

無意識のうちに選択したこのルールは正しかったのであろうか」と。、、私たち日本人も、授業で遠い国の歴史を知って、彼等に対する理想を述べるだけの消極的な態度ではなく、無関心に生きている自分たちを改めて感じ、このままではいけないと行動を起すことを選択出来る日本人が増えてゆくことを私は期待しているし、自分もその一人になれたらと思う。」

1-6. H. モムゼン「文明の薄い上塗り」1996年、『第三帝国におけるユダヤ人問題の最終解決』1991年。

モムゼンは様々な観点からゴールドハーゲン説に反論している。反ユダヤ主義に関して、彼は反ユダヤ主義は最終解決の実施には必要条件であったが、十分条件ではなかったと主張する。ゴールドハーゲンは、イデオロギー的熱狂、病理学的混乱、道徳的退廃、官僚的完全主義、まさに「悪の陳腐さ」の入り交じった中にホロコーストの原因を見るのではなく、肥大化したドイツ反ユダヤ主義にその原因を見ている。彼の視点からすれば、ヒトラーは中世以来ユダヤ人敵意によって特徴づけられるドイツ史の必然的な結果なのである。従って、ドイツ民族は反ユダヤ主義的「原民族」となる。モムゼンはこれらの主張は学問的にも受け入れられないと言う。彼は以下のように主張する。絶えざる競争の上に作られた制度の構造が、「累進的急進化」をもたらし、ユダヤ人粛清につながった。行政的・官僚的要因がナチエリートの中のユダヤ人憎悪とならんで重要である。イデオロギーばかりでなく、物質的利害も重要な役割を果たした。大量殺戮に向かった段階は複雑な政治過程の結果であった。この過程の中で、体制内の内部闘争が徐々に選択を妨げ、結果としてユダヤ人の身体的絶滅が唯一の方策に思われたのである。ナチスによるユダヤ人迫害は周到に準備された計画に従って実行されたのではなかった。それは「試行錯誤」の結果であった。モムゼンもまた、ドイツ市民の道徳的責任は、ユダヤ人の排除を受動的に受け入れた点にあると指摘している。彼は述べている、ホロコーストは人種嫌いと少数派集団への社会的憎悪に対する警鐘である、しかしそれはまた、公的私的道德性の操作と改ざんは進歩した工業社会でも依然として脅威である

ということを想起させるものであると。

「一体、なぜ500万以上のヨーロッパユダヤ人の殺害という想像できない夢想が、表現出来ない現実となったのであろうか、しかも恐ろしい効率性を持って。」今の私たちの心をそのまま表すとして、モムゼンの言葉を借りるとしたら、まさにこの一行は最適だと言えはしないだろうか。私たちは数字を見ながら、犠牲になった人びとの人生を、ドラマをすべて窮屈な統計にしてしまった。…、(モムゼンの主張から理解したことは)ヒトラーはジェノサイドを行えという現実的な意図を容認したわけではなかったこと、ユダヤ人虐殺について積極的な行動を取ったことはないということであった。私たちは小学校の時から、ホロコーストはヒトラーのせいだ、ヒトラーだけが悪い人だとかのような教育を受けてきた。しかし実際はどうであらうか。ヒトラーよりも悪人、残忍な人間も他にも沢山いるではないか。私は何を学んできたのかと呆然としてしまった。…、「ユダヤ人は(最初の犠牲者であったが)唯一の犠牲者ではない」私は一瞬ヒトラーさえも、熱狂的反ユダヤ主義者に仕立てあげられた犠牲者であったのかもしれない、と頭の中にとんでもない考えをよぎらせてしまった。彼が犯罪者であったのは確かだ。しかし、彼も状況の中で、戻りたくても戻れない道を歩くしかなかったのかもしれない。…、私が冒頭で述べたように、数字を知るために学ぶのではない。数字の下に隠された真実を知るために学ぶのである。私の頭の中にあるイメージだけが真実であるとは限らない。教科書が真実であるとは限らない。1枚のページの中に、1つの統計やグラフの中に、まだまだ学ぶべき真実があるのだと、再確認させられた論文であった。」

1-7. Ph. ビューラン『なぜドイツ人が』2004年。『ヒトラーとユダヤ人』1996年。

ビューランは以下の問題に答えようとした。1. なぜドイツが悲劇の場所となったのか 2. なぜ1933年以降のドイツ社会でユダヤ人敵視の偏見が基準となったのか 3. なぜ人びとはユダヤ人殲滅に賛成したのか。

彼の見解の中では、反ユダヤ主義は重要な役割—伝統的に烙印を押されてきた住民グループを迫害者に引き渡すこと—を果たしている。その意味するところは、反ユダヤ主義は多数派(キリスト教世界)内部において、対ユダヤのアイデンティティを作り出すということであった。反ユダヤ主義はアイデンティティをめぐる戦いにおける一つの武器である。彼は反ユダヤ主義を文化、共同体のアイデンティティの定義に役立つような思想の複合観念として分析しようとした。すなわち多数派社会は自らの不安と緊張を表明し、自己のアイデンティティへの疑念を克服しようとする。ユダヤ人の否定的像と多数派社会の肯定的自画像との弁証法的分析が見られる。「ユダヤ人がアイデンティティの定義に対する否定的な座標系となればなるほど、そこから導き出された反ユダヤ主義は一層危険なものとなる。」ビューランの結論は、「狂気の受容はドイツ人のアイデンティティがユダヤ人によって脅かされているというナチ・アイデンティティをナショナルなアイデンティティとして受容したことによって起きた。ユダヤ人の「他者性」は生存に関わる問題として受け止められた。唯一最終の原因ではないが、反ユダヤ主義がナチ政府のユダヤ人敵視政策と特にその絶滅政策を決定した。」というものである。

「私が真っ先に思ったのは、何かを否定する事で生まれ、確立されるアイデンティティなら、そんなものはいらない」という事だ。自分の核となるアイデンティティが誰かを否定し、自分という人間を確立していくのなら、それは否定ばかりが詰まった本質的な「私」は存在しない、わただけのぬいぐるみみたいなものではないだろうか。ヒトラーを初めとするナチス政権に詰め込まれた「反ユダヤ」というわたで一杯になってしまったドイツ人はみんな人形になってしまった。それも操り人形であり、その糸に気づかないでいた人形に。彼等は命を持った操り人形であったのだ。..、ヒトラー自身もそうだったのではないかと、私は思うのだ。彼の後ろにいた、自分の手を血に染めずにユダヤ人の虐殺を遂行しようとした人びとには、ヒトラーが必要であったのである。..、ヒトラー自身もユダヤ人を否定していくことによって、ジェノサイドを決定す

ることによって、自分のアイデンティティを、後には戻れないそのアイデンティティを確立していった。ドイツは否定で一杯だったのである。しかし私たちもこのドイツ人と同じなのではないかと思う部分は沢山ある。、、、ひっくり返った世界、まさにこれである。「たとえ無実の者であったとしても、ユダヤ人のジェノサイドをやり抜く」ユダヤ人抹殺は正しいこととされた悪であった。多数派の善とされた悪であった。、、、私のアイデンティティは根本が分裂していると前回言ったが、私はこの分裂したバックグラウンドを決して否定しはしない。「皆とは違う」という違いを肯定し、原動力にしている。私の原動力は、この分裂したアイデンティティが融合する所から生まれている。このように、一見否定されがちに見えるものも、転じれば大きな力になる。それを私は確信しているのだ。」

1-8. G. アリー『ヒトラーの民族国家強奪戦争、人種戦争そして国民的な社会主義』2005 年。

アリーは排他的反ユダヤ主義と外国人憎悪がホロコーストの主要な原因であるという見解を否定し、「現代史の中で最も首尾一貫した大量強盗殺人として分析されない限り、ホロコーストは理解出来ないままである。」「何百万という一般ドイツ人が多くの利益を得ていたという事実に関して語りたくない者は、ナチズムやホロコーストについては沈黙すべきである。」と語っている。彼のテーマは、いかにして 12 年におよぶ破壊をこととする不安定な支配が短期間に驚くべき高い水準で国内統合を実現することが出来たのかということであった。アリーは、ナチ支配を「国民に仕える体制」、「親切を振りまく独裁」と見る。ナチ政府は日々新たに国民の歓心を、少なくとも無関心を買いつけた。それは国民的な社会主義として理解されるものである。「広範な強奪・人種戦争を基盤にして、ナチズムはドイツではかつてなかったほどの平等と社会的上昇を可能にするように配慮した。それはナチズムに国民の支持を集めさせたが、同時にそれは犯罪的であった。物質的豊かさと、この大犯罪からの利益を享受したことが大多数のドイツ人の意識を決定した。」アリーは、大多数の

ドイツ人はナチ政府の金儲け策に喜んで同意したか、あるいは政府が独裁維持のために設けた制度に消極的な忠誠を誓った共犯者であるとする。ドイツ人の95%は直接間接に大量強盗殺人から利益を得たという。ドイツ人は「ヒトラーの満足した強盗達」の共犯者であった。

「『国民に仕える独裁』も『親切を振りまく独裁』も結局はそう見えただけで、実際は自分の欲を満たし、反ユダヤ主義の名の下に自己実現を目指した連中の芝居でしかなかった。本当に、「情けは人のためならず」ならぬ、「芝居の情けも人のためならず」である。私はそう強く感じた。ドイツ国民に甘い蜜を吸わせ善人を演じる一方で、それは他の巣から略奪した蜜であるという現実があった。…、私は今まで、ユダヤ人のホロコーストを道徳的観点からしか批判出来なかった。真実を知れば知るほど、私は色々な視点からこの悲劇を捉えられるようになった。これは私にとって大きな収穫であった。一つの出来事を複数の視点から捉えられて初めて正しい判断が出来る。その意味を初めて理解出来た。」

1-9. Y. バウアー「目標としての殺害」2004年、「ドイツ社会とユダヤ人」2000年。

バウアーは、ナチズムの特徴の一つとして、急進的な反ユダヤ主義思想を持つ官僚による「殺人の官僚化」を挙げる。彼によれば、ホロコーストの先例のなさ、その非実用主義的イデオロギーにも見られる。ホロコーストにあってはイデオロギーの理由が決定的であった。それはキリスト教的反ユダヤ主義と新しい人種主義的反ユダヤ主義に立脚した純粋なイデオロギーであった。ナチ国家は人種の位階性を打ち立て、その位階性に基づいた世界秩序を構築しようとした。ナチズムは20世紀の中でおそらく最も急進的に人間性を変革しようとした試みであったろう。その目標を実現するためにナチズムは人間の文明そのものを否定せざるを得なかった。ユダヤ人は「生来の」絶滅対象であった。ユダヤ人はナチスが戦いを挑んだすべての価値と伝統を代表していたからであ

る。バウアーは最後に指摘している、「絶望的な状況の中で殺害と向かい合い、脅威にさらされた人びとを救助した非ユダヤ人とユダヤ人も存在した。」と述べ、希望はなおあるとした。

「ドイツ人は結局一度もユダヤ人に勝つことは出来なかったのではないだろうか。…、命を奪われ、肉体は滅んでも、彼等の精神は歴史を生き続けた。そしてユダヤの人びとは、生きている人も犠牲になった人びとも、あのテロルを生き抜いたという誇りの上にアイデンティティを確立させることになった。しかしドイツ人は大きな罪を背負い、人間が行えるであろう最大の禁忌を犯したという罪悪感と重さがそのアイデンティティには根付いている。」

II. ビデオを見て考える

2-1. 1941年1月20日の「ヴァンゼー会議」再現ドラマのビデオ

「もし自分の民族が決して許されることのない罪を背負って生きて行かなければならないのなら…、私は引き裂かれた人間である。半分は17世紀、祖国であるアイルランドをクロムウェルによって支配された時に流された血と同じ赤い血が流れ、もう半分は20世紀、日本が朝鮮半島を支配した時代にその土地を血で真っ赤に染めた、その手と体に流れていた血。私は果たしてどう生きて行けばいいのか。一方で歴史の犠牲者となり、もう一方で私は罪を背負った犯罪者なのだ。しかし、どちらの気持ちも、どちらの痛みも分かる特殊な位置にいるのかもしれない。勿論どちらの出来事にも直接関わっていない。しかし、私たちは忘れてしまいそうで、決して忘れてはいけない歴史を、真実を学び続ける。ホロコーストしてはいけない犠牲や命が、そこには生き続けているからである。…、現時点で私は、彼等(ユダヤ人)が犠牲にした命を、歴史の中に生きる命を、思想から言葉へ、言葉から行動へと忘れずに伝える事が私の役割だと思っている。」

2-2. クロード・ランズマン 「ショア」のDVD

「想像できない現実が世界を、欧州を、ドイツを、ユダヤ人を包んでいた1940年代前後、その現実を生き抜いた人びとの口から紡がれた言葉を、私はただ聞く事しかできなかった。それは私たちの理解と想像を超えた現実。歴史の中で命を持つことのなかった「ユダヤ人迫害」の6文字が、彼等生存者の言葉によって命を持った。鼓動を打ち始めた。、、、もしこの頃のドイツのように、今日本が民族浄化を行ったら、私はここでいうユダヤ人と同じ立場になる。想像して欲しい。、、、この講義室 D115 から果たして何人姿を消すのだろうか。少なくとも私は、純血で高貴と言われる日本人のために席を空けるうちの一人だ。、、、私たちは(ユダヤ人の体験した)その恐怖を体験することは出来ないけれど、他人事と考えるので欲しい。今民族浄化、外国人排斥が起れば、その犠牲にあう友人は必ずいるのだという事、そしてあなたたちは傍観者でいるのかという事を。」

2-3. 「アウシュヴィッツ証言者はなぜ自殺したのか」(ETV 2003 年)のビデオ

プリーモ・レーヴィ(1919-1987)、強制収容所に移送された650人のイタリア系ユダヤ人の中で生き残った3名の内の一人、1987年自殺。彼の墓石には「174517」とのみ記されている。

「『これが人間か、考えて欲しい 泥にまみれて働き 平和を知らず パンのかけらを争い 他人がうなずくだけで死に追いやられるものが。』(レーヴィ『これが人間か』)「これが人間か、考えて欲しい 人を虫のように殺し 己の欲にまみれ たやすく銃口を人に向け 気に入らないというだけで消そうとするものが。」と聞かれたら、私は間違いなく「ああ、それが人間だ」と答えるだろう。、、、プリーモはこの地獄を生き抜いたほんのわずかな一人だった。しかし強制労働の中で蝕まれたその心は解放後も決して自由になることはなかった。解放後も、彼等わずかな生存者の心は、収容所から出られたというのに、

まるで足枷をはめられているかのように、鎖に締め付けられたままであった。…、囚人番号を彫られた女性達を見て、「ああ、この人達は生きた記憶なんだ。」と思った。…、記録としてしか知らない戦いだからこそ、私たちには希望がもてる。経験という実体験の上では無知である私たちも、記憶の上では無知ではない。だからこそ持てる希望が、明るく平和な未来を祈れる余裕が、争い一つつつでも減らしたいという願望が、私たちにはあり、そうする事を求められ期待され、そうする義務がある。」

III. 講義の後で

「私がこの授業で学んだ一番大きな事は、教科書に書かれた一行も、記憶の中の一行にも、その言葉に留まらない重さと深さと、ドラマがあるんだという事だ。「表現出来ない現実」がいかにして起り、どのように経過し、決して下がる事のない終幕を降ろそうとした所までを、こんなに細かく詳しく調べた事も考えた事もなかった。この授業でなければ素通りしていた「ドイツ人はユダヤ人を迫害した。」という一行が、初めて命を持った、生き始めたのである。こうやって一つの事をここまで深く掘り下げて考えてみると、国や時代は違えど他人事のように思えなくなってくる。いや、実際他人事でなくなったと感じ続けた4ヶ月だった。…、こうやってユダヤ人に起こった悲劇と真剣に向き合ったからこそ、今はホロコーストだけじゃなく、朝鮮・韓国と日本の問題、沖縄やアイヌの人びとに起こった現実も、私は真正面からぶつかってみたいくなったのである。私の知らない何かを真剣に学んだからこそ、今とこれからをどう生きるべきかを真剣に、そして具体性を持って考えられるようになった。私には自信がある、とはっきり言える。何かを真剣に考えるのと同様、しっかりやり抜くことも大切だ。ユダヤの人びとが諦めなかったように、希望を抱ける私は諦めたくない。彼等の生き方や涙は私の背中を押してくれる勇気となった。」

おわりに

講義の目標として、他者の発言を十分に聞き取ること、問題とされる事柄を自分の問題として考えること、さらにそれを自分の言葉で表現するように努めることを挙げた。ここには課題に対するその真摯な取り組み、格闘を見ることが出来る。また、特にこのレポートから衝撃を受けたのは、二つの祖国を持つ者の視点こそが重要ではないかということである。ホロコースト問題は日本人の視点からでは十分に理解出来ないのではないかということであった。